

2009年の世界の不登校研究の概観

— PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から —

佐藤正道

要約

日本の不登校の問題を考えるうえで、常に世界の研究に目を向け続けることは必要である。筆者は1980年から1990年までの研究の概観を行い、その継続研究として1991年から毎年、ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の、2003年以降は PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の不登校との関連が考えられるキーワード school attendance, school dropouts, school phobia, school refusal を持つ文献を分類してきている。その継続研究として2009年の文献73件について取り上げ分類し検討を加えた。

Key words : school attendance, school dropouts, school phobia, school refusal

I はじめに

筆者(1992a)は、諸外国と日本における不登校の初期研究を踏まえた上で、ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の school attendance, school dropouts, school phobia, school refusal をキーワードとする1980年から1990年の400件あまりの文献を中心に各国別、年代順別に分類し、不登校研究の概観を行った。不登校の問題を考える上で、日本国内ばかりではなく世界の研究に常に目を向け続け、1年毎の形式で蓄積していくことは意味があると考え、1991年からそれぞれの年の文献について継続研究を行ってきた(1992b,1993,1994,1995,1996,1997,1998,1999,2000,2001,2002,2003,2004,2005,2006,2007,2008,2009)。

本研究は、2009年の文献についての継続研究である。今回の研究では、これまでの研究と同様、ERIC データベースと DIALOG データベースの PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS (PsycINFO データベース)を用い、文献検索を行おうとした。しかし、ERIC データベースは2003年の文献以降、データベースの検索方法を変更したため、2003年以降の文献については、年毎の検索ができなくなった。2009年の文献についても検索方法が変更のままで、同様の形態の検索ができない状態のままである。したがって、2009年の文献については、PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS のみとなる。検索方法は、インターネット経由での作業を行った。これらの中から不登校との関連が考えられるものについて、キーワード毎に分類した。筆者の作業(1992a)に続くこの継続研究は、今回で19年目に当たるが、同一規準で19年分の作業をし、世界での傾向を把握する基礎研究の2009年分である。なお、PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS での検索

形態が変更になった段階でこの基礎研究は終了することとする。

なお、ERIC データベースについては、キーワードでの検索については、佐藤の行っている経年変化という形態での活用はできないが、費用が発生しないこともあり、現在も更新され続けている、有用な活用のできるデータベースである。

DIALOG データベースでの PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS では、school attendance に関する文献が 678 件、school dropouts に関する文献が 230 件、school phobia に関する文献が 342 件、school refusal に関する文献は 208 件であった。

PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS データベース 1,558 件の文献の中で不登校との関連が考えられる 73 件について、キーワード毎に分類し、研究の概観をする。

II 各キーワード毎の研究の概観

ここで取り上げる研究は、2010 年 6 月現在、PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS (PsycINFO データベース)において検索し、不登校との関連が考えられる 2009 年分として収録されている文献である。ここでは、日本の幼稚園・保育所から高等学校に対応する学年までの不登校との関連が考えられる文献を取り扱っている。

1 school attendance に関する研究の概観

2009 年の school attendance をキーワードに持つ文献は 678 件が見いだされる。これらのうち、ここでは 19 件を概観する。国別では、アメリカ合衆国が 10 件、オーストラリアが 1 件、英国が 3 件、マルタが 1 件、アイスランドが 1 件、中華民国が 2 件、インドが 1 件である。

Gavin ら(2009)は、アメリカ合衆国の 4,918 人の国家を代表するサンプルでの成人期のうつ病の生涯にわたる広がりや児童期の家族構造の間の関係があるかどうかを調査研究している。

(1)実の両親の存在、(2)一人の実の親と継父母、(3)一人の実の親、(4)実の親がいないという 4 つの家族構造の形態に基づいて、家族構造とうつ病性障害の間の関係が異なっているかどうかについて研究を行った。使われているデータは、アメリカの生涯国家調査から得られた。調節された分析法では、すべての回答者の間で、成人期のうつ病のより高い確率は、実の両親のもとで成長した人々と比較すると、一人の実の親と継父母のもとで成長していることと関係していた。性別によって層化される分析法では、児童期の間に一人の実の親と継父母と一緒に暮らした女性だけには、成人期にうつ病性障害の増加したリスクが見られた。結論として、一人の実の親と継父母と一緒に家庭で成長することは、黒人女性の間では、成人期のうつ病性障害と明らかに関係していた。将来的研究として、うつ病性障害の長期の結果に児童期に家族の構造とつながる経路とを調べ続けなければならない。

Gerdes と Schneider(2009)によると、ADHD に有効な治療処置をサポートするデータを通して、民族的に少数である家族のこれらの治療介入を調査する研究はほとんどない。ここでのケース研究では、スペイン語を話すラテンアメリカ系家族に焦点を当て、証拠に基づく治療処置を実行している大学ベースの ADHD クリニックで評価され、治療がなされている。治療処置の過程を論

じることに加えて、ケース研究では、民族的に少数である家族を治療している時に直面する挑戦の幾つかを取り上げ、児童の心理療法での民族性と治療処置の結果を十分に展開するのに必要な研究の幾つかの道筋を特定している。

Chen ら(2009)は、中華民国での全国を代表する対象者を用いて、中華民国での校内暴力の悪行の広がりを見出しようとしている。ここでは、アジアの文化的関係で生徒が暴力行為を犯すことに性別、年齢、学校の形態がどのように関連するかを研究している。対象者は、4年生から12年生の初等学校から高等学校の14,022人の生徒が含まれていた。生徒は学校での暴力行為を報告する匿名の質問紙に回答した。この研究に表される調査結果は、級友に対する暴力行為を行う理由に関する洞察を提供している。調査結果からは、悪行の広がりが環境の違いで変化するかも知れないが、暴力に関する年齢、性別、学校形態の影響は中華民国においては理論的に西洋の文化でなされている研究に基づいて予測されるものと同様の傾向があることを示唆している。大多数の実行者は、無鉄砲な遊びから、あるいは先ず最初に楽しんでいた状況から生じる暴力行為に関与していると報告していた。

Crocker ら(2009)から、日常的な要求に応える能力、適応行動が、重篤な出生前のアルコール暴露の影響に特に敏感であるかも知れない。類似の適応機能障害は注意欠陥多動性障害(ADHD)を含むその他の発達障害にも一般的である。ADHDは出生前にアルコールにさらされた子どもにしばしば現れ、臨床症状のこの重複はアルコールにさらされた子どもの特定を困難なものにしている。出生前のアルコール暴露とADHDの子どもの直接的な比較は、認知的行動的達成の異なった形態を与え、出生前のアルコール暴露の神経心理学的行動的プロフィールの発達する知識を加えるかも知れない。したがって、目下の研究のねらいは、重篤な出生前のアルコール暴露の履歴のある子ども(ALC)、アルコールに暴露されていないADHDの子ども(ADHD)、典型的な発達上の統制群(CON)での適応行動を比較することである。ALCが22人、ADHDが23人、CONが20人、計65人の子どもが、アルコールの行動先天異常誘発性の比較的大きな進行中の研究から選択された。アルコールにさらされた群と統制群は年齢、性別、社会経済的状況、人種民族的にADHDの対象者と一致していた。介護者は、Vineland 適応行動評価尺度、半構造的面接がなされ、適応機能の3つの領域に関して子どもの行動を評価するよう求められた。データは回帰的技術で分析された。結果として、統制群と比較して、ALCとADHD群の子どもは、3領域すべてにおいて適応行動の欠損を示し、ALC群の子どもでは、日常生活のスキルの領域でADHD群よりもかなり損なわれていた。ALC群内では、社会化標準得点が比較的高い年齢で低かった。以前の研究結果では報告されていなかったが、ALC群での年齢と標準得点の間の否定的関係はコミュニケーション領域でも観察された。結論として、出生前のアルコール暴露とADHDの子どもは、統制群と比較して、適応機能での障害があるが、障害の形態はこれらの臨床群の間で異なっていることを示唆している。社会性とコミュニケーション得点での年齢による改善の欠如によって示されているように、出生前のアルコール暴露の子どもの適応能力は、発達上の停止によって特徴づけられる。一方、ADHDの子どもは、統

制群の子どものレベルにはないが、年齢とともに得点が改善され、適応能力の発達上の遅れを示している。アルコールにさらされた子どもに存在する欠損の形態を説明することに焦点化した継続研究は改善された鑑別診断と効果的な治療介入につながるものである。

Ciarrochi ら(2009)は、青年男女が彼らの仲間の性格特性とは異なった応答をする可能性を探っている。381人の男子と389人の女子の生徒が7年生から10年生まで(平均年齢12.28歳)に人格尺度を測定し、9年生から10年生に調整と嗜好の仲間評価を行った。分析から、女子の調整評価が同意可能性、良心的であること、Eysenckのサイコティシズムの男子のレベルに影響を与え、男子の評価は女子のこれらの特性によっては比較的影響を受けなかった。男女は同性が好きだったよりも反対の性でのエクストラバージョンを好んでいた。仲間関係と性別の違いを理解するためにこれらの研究結果の意味を論じている。

El Ansari ら(2009)によると、適切で許容できるヘルスケアへのアクセスの不平等は、黒人と少数民族のコミュニティ(BME)出身の人々の中のよりひどい健康状態、短命、ヘルスケアのものすごい不満につながっている。言語は、アクセスに対する更なる障害につながっている。BMEコミュニティ出身の人々がヘルスケアの必要性を適切に満たしておくことができることを確実にするために、バイリンガル擁護の発展は、2つの鍵となる機能—解釈と擁護—を融和させている。バイリンガル擁護の発展について、100以上の異なる言語を話す非常に多様な人々がいるイースト・ロンドンで調査を行っている。NHS大学病院トラストによるバイリンガル擁護サービスの発展、発展に影響を与えた要因とこれらのサービスの局地的な体験を考察している。

Scheel ら(2009)は、school attendanceにも関連するが、school dropoutsで取り上げる。

Spencer(2009)は、8年生の無断欠席者と特定される都会の生徒の登校状況の年代順の形態と学業成績を調査研究している。入学から8年生までの42人の生徒の年代順の登校記録から、高頻度の長期欠席と入学後すぐの学業成績上の問題があり、多くの場合に、小学校と中学校の年度にわたって、この問題は続いていた。結果によれば、学校組織内の登校状況の進行中の分析から、小学校高学年と中学校の学年での怠学につながる長期欠席の初期の形態が特定される。学校で奮闘している子どもに対する早期の適切な照会と評価と同様に社会情緒的なサポートの必要性を示唆しており、小学校の児童の中での長期欠席と低い学業成績への対応として、原級留置と進級の実践に異議を唱えることになる。

Durell ら(2009)によると、アフリカ系アメリカ人の児童青年での注意欠損多動性障害(ADHD)の管理に関するデータは限られている。2カ所のマルチセンターの非盲検試験の事後下位群分析を行うことによって、アフリカ系アメリカ人の児童青年でのADHDの管理において、塩化アトモキセチンの耐性、安全性、効果を評価しようとした。有害な事象のため治療処置を継続しなかったアフリカ系アメリカ人と白人は3.0%以下であり、アトモキセチンは安全で十分通用するものであった。白人のかなりの割合が、嘔吐(7.2%対1.2%, $P=.037$)、疲労(6.1%対0% $P=.012$)を含む1%以下の治療処置と現れた有害な事象を報告していた。重大な安全への懸念は観察されなかった。高さ、重さ、血行力学的変数での基準値からの変化は、両方の下位群で

穏やかであり、類似していた。調査者が管理得点する平均 ADHD 尺度IV-親版 (ADHDRS-IV-P・I) では、基準値から終点まで、アフリカ系アメリカ人と白人ではかなりの改善が見られた。重要な下位群間の差がないまま、得点はアフリカ系アメリカ人で 20.1, 白人では 19.55 だけ減少した。両方の人種群での患者は ADHDRS-IV-P・I の不注意, 多動衝動的兆候, 臨床的全体の印象 ADHD 重篤度, Conners の親得点尺度改訂縮刷版で、類似のかなりな改善を体験していた。アトモキセチンは、ADHD のアフリカ系アメリカ人と白人での類似した耐性のある、安全な、効果的プロフィールを示していた。

Cefai と Cooper (2009) は、教育的な体験の様々な側面で自分の考えを展開している社会的、情緒的、行動的困難さ (SEBD) を抱えているマルタの高校生と行っているいくつかの最近の研究の概観を行っている。この地域で利用できる研究が少ないということは、学校での生徒の声、とりわけ SEBD の生徒の声に対する注意の不足が反映している。

Wood ら (2009) によれば、注意欠陥多動性障害 (ADHD) に対する治療介入への教師の推奨に関する生徒の性別と民族性の影響に関して、168 人の小学校と中学校の教師が調査研究に参加した。参加した教員は、民族分類と性別を記載した生徒写真が添付してある ADHD の生徒が記述されているシナリオを読んだ。その後、どれくらい強く一般的な治療介入を推薦するかを尋ねられた。調査結果から、白色人種よりも少数民族の生徒に対して、親ではない関係を必要とする治療介入を推奨している。小学校と特別支援学校の教師は、中学校や通常学校の教師よりも多くの経験的なサポートのある治療介入を推薦しようとしていた。学校での治療介入選択に対する結果と将来の調査研究に対する示唆が概観される。

Kristjansson ら (2009) は、一人当たりが高収入の北欧の国、アイスランドの青年男女の親のサポート、親の助言、親と費やす時間、学業成績との関係を調査研究している。学校での努力の間接的な役割についても調査研究している。7,430 人の 9 年生と 10 年生のデータが分析された。構造式モデルから、親の要因は、すべて男女とも学業成績と関連していた。男女ともこれらの関係は学校の努力を通しては大部分は間接的であった。親の要因と学業成績の関係は男女とも強さの点では同様であった。男子は親のサポートと助言は女子より少なかった。

Crawley ら (2009) によると、不安兆候は慢性疲労症候群や筋痛性脳症 (CFS/ME) の子どもで一般的に記述されているが、現在まで、不安のある子どもの体験のタイプや不安、登校状況、障害、疲労との関係に関する情報はほとんどない。第 1 に通常のヨーロッパの人々と比較して CFS/ME の子どもでの不安兆候の広がりタイプを記述すること、第 2 に、小児科の CFS/ME での年齢、性別、登校状況、疲労、身体機能との不安兆候との関係を調査研究することをねらいとした。データは、大規模な専門の CFS/ME サービスに照会された CFS/ME の子どもと若者から収集された。CFS/ME の 164 人の子どもについては Spence 子ども不安尺度に対する完全なデータであった。十代の女子は、通常のヨーロッパの人々のトップ 10% のカットオフの 38% (95%, CI 27-49) の全体の不安兆候の最も高い割合であり、それぞれの下位尺度で兆候がかなり高い割合となっていた。比較的若い女子は、分離不安 (37%, 19-40) と社会恐怖 (39%, 25-47) で

のカットオフにわたる得点となった。すべての不安の兆候と学校での時間、評価に対する時間、痛みや年齢との関係についての証拠はなかった。他の変数の調整後、疲労と身体的機能との関係は希薄化された。不安兆候は、特に十代の女子において、CFS/ME では高いけれども、登校状況や障害のその他の尺度と関係が見られるかも知れない。分離不安と社会恐怖は小児科で最も明らかに上昇した。

Daley ら(2009)は、就学前児童での注意欠損多動性障害(ADHD)についての表現、病因学、治療の概説をしている。親の訓練治療介入の概観は、就学前児童の ADHD の症状を減少させる十分に有効な証拠があるということが示され、3 つの治療介入、新しい森の親訓練プログラム(NFPP)、トリプル P 肯定的親プログラム、素晴らしい年・親訓練プログラム(IY)が評価されている。トリプル P と IY プログラムは、現在まで、行為上の問題と、併発する ADHD を抱えている子どもにのみ表わされているが、NFPP の評価は ADHD の就学前児童に対する有効性を示す強い証拠を提供している。親の訓練は、ADHD のサインを現す就学前児童に対する最初の選択された治療処置であり、親の訓練が有効ではない子どもに対してのみ持ち出される薬物であるべきである。親の ADHD を除いては、これらの治療介入に対して、結果の仲介者はほとんど特定されなかった。治療介入と実施の忠実度に対する障碍は、登校状況、完了、有効性の高水準を達成するために対処する必要がある。IY プログラムは、アドレス指定忠実度問題に対して、治療介入に対する障碍を解決するための良いモデルである。

Tang ら(2009)によると、学校での通常の治療処置(TAU)と比較することによって、自殺の危険性のある抑うつ状態にある青年男女に対する集中的な人間関係療法(IPT-A-IN)の治療介入の効果を調査研究することを目的として研究を行っている。中華民国南部の高等学校の学級の 1/9 から 347 人の生徒が、自殺の危険性のふるい分けのために、Beck 抑うつ尺度 II、Beck 自殺念慮尺度、Beck 不安尺度、Beck 自殺の危険性に対するふるい分けによる絶望尺度を行った。被験者の中で、ふるい分けで自殺の危険性がある 73 名の抑うつ状態にある生徒が、IPT-A-IN か TAU にランダムに配置された。抑うつ状態、自殺念慮、不安と絶望の重篤さの軽減に対する IPT-A-IN の効果を調べるために、共分散分析(ANCOVA)が、実行された。共変量として、治療介入前得点を用い、IPT-A-IN 群は、TAU 群より抑うつ状態、自殺念慮、不安と絶望の治療介入後の低い重篤さであった。集中的な学校ベースの IPT-A-IN は、結論として、自殺の危険性のある抑うつ状態にある青年男女の抑うつ状態、自殺念慮、不安と絶望の重篤さを軽減するのに有効であった。

Don と Glen(2009)によると、第三の行動サポートの効果を支持している文献があるが、大部分の研究は一つの主題のデザインで実施されてきている。予防教育強化(PTR)モデルは、学校を基盤とする第三の治療介入の標準化されたモデルである。PTR モデルが典型的な教職員によって実行されるものとして、例えば通常のサービスのような、典型的に用いられる治療介入よりも効果的であるかどうかに関わらず、比較する無作為対照化実験から、最初の結果を報告している。現在まで、K8 の 245 人の生徒が研究に登録され、予備調査結果から、通常通りのサー

ビスを受けた生徒と比較して、PTR 治療介入を受けた生徒は、かなり高いソーシャルスキル、学業に関わる時間、かなり問題が少ないということが分かった。教師は治療介入に対して高い社会的に妥当性のある評価を与えている。

Plank ら(2009)は、学校を社会的障害の環境と認識であると考えている。学校が、障害や物理的なリスクによって特徴づけられるとき、基本的な教育目標と過程が危うくされる。窓ガラスの破損、貧弱な建物状況のような物理的障害、恐怖、総体的な有効性、社会的障害の間の関係を調査するために、中部大西洋の大都市の6~8年生に該当する33校の公立学校からの調査データを用いている。総体的な有効性の事前のレベルが統制されている時でも、経路分析は物理的障害と社会的障害の間の直接的な関係を明らかにし、研究結果は、伝統的な割れ窓理論と一致している。さらに、物理的障害の影響は、恐怖が増加し、総体的な有効性が減少することを通して、物理的障害の影響が、人々の間で脅威や暴力的関係と感ずることに影響を及ぼすことになる証拠が存在している。

Logan ら(2009)は、主として白人の青年女性の慢性的な痛みをかかえた患者の、登校状況、成績、自認できている学力、教師の評価した学校適応を含む、抑うつ兆候と学校機能の関係を調査研究している。12~17歳の臨床的に照会された217名の青年女性と親について、痛みの特徴、抑うつ状態、学校機能の調査を行った。更なるデータは、成績の記録と教師の報告から集められた。抑うつ状態の兆候は、強く学校機能指標との相関が見られた。線形回帰分析において、抑うつ状態のより高いレベルが、より多くの学校障害を予測していた。抑うつ状態が、目下の痛みの強さと学校機能に関する痛みの治療介入への親の認識との間の関係を媒介するかどうかデータによって支持されていた。抑うつ状態の兆候は、慢性的な痛みのある青年女性の学校の障害の範囲に影響を与える鍵となる役割を演じている。抑うつ状態を軽減する治療介入はこれらの人々の学校機能を改善するようにデザインされた治療処置を強化するかも知れない。

Konantambigi ら(2009)によると、教室で、学習上問題のある生徒を教える際、数学指導への特別な対応に際し、学習上問題のある子どもを特定する基準に関し、教師が用いる指導戦略を展開している。この目的のため、ムンバイの12校のサンプルが用いられた。グレードIVの10名の子どもが各校で特定され、これらは、教師が特定した5名の学習上問題のある子どもと、学籍から任意に選択された問題のない5名の子どもであった。学習上問題があると教師が特定した子どもと教師の関わりを撮影したビデオの観察を行った。学習上の問題は、学習障害に対する行動チェックリスト、学習障害診断テスト、教師の面接によってもチェックされた。結果によれば、教師と同様に両方のテストによっても問題が明らかになった。教室で学習上の問題を取り扱うことに関する教師の訓練の必要性があるという研究結果が導き出された。

2 school dropouts に関する研究の概観

2009年のschool dropoutsをキーワードに持つ文献230件のうち、関連の考えられる15件に

ついて概観する。国別では、アメリカ合衆国が 9 件、ベルギーが 1 件、スペインが 1 件、エジプトが 1 件、カナダが 2 件、英国が 1 件を取り上げることとする。

Scheel ら(2009)によると、中途退学は、個人的かつ社会的に悲惨な結末を伴う問題である。驚くべきことではなく、中途退学する生徒は一般に学習上の動機づけがなされていない。この現象学的な研究では、主として、カウンセリングを用いる中途退学防止プログラムに参加している間に、生徒が学習上の動機づけを形成する意味を調べている。20 のインタビューがなされ、筆記された。6 つのテーマが、172 の重要な発言と自己有効性、学校の目的、家族の影響、学校での関係、カウンセラーの影響、学校の構造と学校での活動という対応する意味単位から現れた。調査結果は、そのような動機づけを育てることでの関係の重要性という学習上の動機づけの本質を明らかにした。カウンセリングを用いた中途退学予防プログラムによって育てられる鍵となる要因として愛情深い関係に焦点を当てている。将来の方針を形成する職業介入の活用、家族の影響、学習上の自己有効性を得るための援助の必要性が含まれる。

Tyler と Lofstrom(2009)は、生徒が高等学校を修了しない時に起こる問題の詳細な観察を行っている。中途退学の問題がどれほど一般的かという進行中の時々白熱する議論を論じることから始めている。適切な生徒のデータの有効性を考慮している。Tyler と Lofstrom 自身は、40 年前に高校を卒業しているが、学校自体は現在とだいたい同様に機能していると結論づけている。しかし、グローバル経済と関連する競争的圧力は、常に教育を個人的および国家的な幸福を決定する際に重要となる。

Claes ら(2009)によると、主に無断欠席が危険な行動や犯罪、薬物濫用と関係しているという議論に基づき、近年、様々な政府と教育機関は無断欠席のレベルを減らす比較的厳しい施策を作成している。個人、学校、地方レベルの間を識別する多水準分析を用いて、無断欠席の原因と結果の一般的な形態を見いだすために、14 才での大規模な、28 カ国比較調査を用いている。分析から、学校が親との関係を促進し、支えとなり信頼できる環境を提供することによって、無断欠席のレベルに学校が大きな影響を与えるということが示されている。社会経済統制変数一式を含んだ後の分析でも、学校の高い無断欠席レベルが生徒のテストの点数を減らすことが証明される。結論として、学校の長期欠席を減らす努力を抑圧的な無断欠席の掃討には限定できないが、学校の雰囲気と、生徒、親、学校との間の相互作用も考慮しなければならない。特に比較的低い家族背景の子どもたちの間で、無断欠席以来の法と秩序の問題が教育的な達成に重要な影響を及ぼすものと、無断欠席を減少させることが見られてはならない。

Gaitens(2009)は、「接続プログラム」と名付けた実地研究をオンライン指示を用いて行い、18 歳以上の危機的状況にある若い成人の卒業率と中等学校後の機会を増加させるため、高等学校の中途退学予防についての伝統的な研究に基づいて行った。2005 年後半に、接続プログラムの実施に資金を供給するというアリゾナ州教育省への提案書を提出している。4 ヶ月後に、接続プログラムの実地研究を実行するために、ほぼ 200,000 ドルの補助金を受けた。

Werblow と Duesbery(2009)は、数学の成績と中途退学率の増加という学校規模が学校効果研

究で一般的に用いられる二つの重要な生徒の成績に影響をする道筋を調査研究している。過去の研究によれば、比較的小規模の高等学校が生徒に対して利益が増加できることを示唆している。2002年の教育的縦断研究(ELS)の最初の2つの波の多水準分析的モデルが、小規模校の効果における要因の媒介となることを理解するのに用いられる。結果は、小規模校の利益を支持しており、小規模校の生徒は、大規模校の生徒と比較して中途退学をしない。高等学校の学校規模と数学の得点との関係は曲線的であり、小規模校(生徒数が674人未満)あるいは大規模校(生徒数が2592人以上)の生徒では最大の数学得点増加となっているが、中規模校の生徒では比較的小さな数学得点の増加となっている。学校規模の意志決定への意味が、これらの結果を考慮して論じられる。

Sharafら(2009)は、階層的重回帰分析を用いて、849人の潜在的な高等学校中途退学者の自尊心と自殺の危機的行動の間に関する家族のサポートによる緩和効果を調査している。家族のサポートは、自尊心の自殺に対する危機への影響を和らげ、自尊心の改善の効果は、低い家族のサポートと高い家族のサポートの中で比較的強かった。高い家族のサポートと同様に低い家族のサポートの若者に対して、自尊心は、青年期の自殺の危機的行動に影響を与えている。自尊心とサポート資源の双方を強化するようにデザインされた治療介入が適切である。

Renkら(2009)によると行為障害はかなりの数の子どもに影響を与え、これらの子どもの情緒的、行動的機能と同様に、社会関係に対する重篤な結果に終わる。関連する問題行動の予測される長期の軌跡と同様に行為障害の広がりが見えれば、この障害を理解し、これらの障害を特定する最も有効な手段を特定し、最も強力な証拠による治療処置を実行することが、行為障害の子どもを持つ家族とともにある精神健康の専門家にとってきわめて重要である。結果として、精神疾患診断統計マニュアル第4版(APA,2000)から行為障害を診断するのに用いられる診断基準を調査研究し、行為上の問題と関連する病因の要因を概説し、行為障害の診断を行う上で関連する評価手段を焦点化し、行為障害と診断された子どもの最良の社会心理学的行動的結果を促進するのに用いられる治療処置を特定しようとするものである。

Langenkamp(2009)は、学校での社会的統合の生徒のレベルがどのように高等学校での成績に影響を及ぼすことができるかを分析することによって、高等学校へ移行する青年男女の学業上及び社会上の分岐点の研究を展開している。全国的に代表的なデータを用いて、3本の異なる経路が、高等学校への生徒移行として現れ、高等学校入学に関する新しい社会的関係に対する混乱と機会の量を変えることによって特徴づけられた。調査結果から、生徒が高等学校に入学するとき、中学校の社会的な統合の要素が、教師の結びつき、人気、課外活動への参加を含み、学業成績に影響を及ぼすことが示唆される。しかし、学校への統合と学業成績の間関係は、生徒がたどる経路に左右されるように考えられる。

Moreno-Gerら(2009)によると、教育でゲームを使うという考え方は、ゲーム自体と同じくらい古い。デジタル・ゲーム産業によって開かれる大きい市場は、教育において特定の可能性に関して大きな関心を引き起こした。この関心は、時々テクノロジーの強化された学習とデジタ

ル・ゲームに対して、伝統的な教育環境の抵抗により妨害されている。将来的には、それどころか、e ラーニング領域はますます有望である。この領域は進化と再発明の過程にあり、学習経験を改善するための新機能とアイデアを求めている。教育的なゲームが e ラーニングでのこれらの新しい方向性の完璧な媒体であると考えられる。

Dupere ら(2009)によると、自殺は不利な条件に置かれた地域に集中する傾向があり、地域的な不利益は若者の自殺の多くの重要なリスク要因と関係している。先に存在している脆弱さを統制して、地域的な貧困と若者の自殺行動の間関係を直接研究しているものはない。貧しい地域に住んでいることが背景となる脆弱さに加えて、後期青年期に自殺企図と自殺の試みとに関係しているかどうか、この関係が後期青年期の心理社会的リスク、すなわち抑うつ状態、社会的支援、否定的な人生の出来事、非行行動、薬物乱用、自殺へのエクスポージャーによって説明されるかどうかを決定することを目的に研究を行っている。地域的な貧困の潜在的な緩和の役割についても調査されている。2,776 人の参加者の下位群が、児童と若者についてのカナダの国家的縦断調査から選択された。後期青年期の自殺行動とリスク要因は、自己申告であった。2001 年の国勢調査が初期中期青年期の間の地域を特徴づけるのに用いられた。後期児童期の家族と個人の統制が、親の報告を通して評価された。結果として、二変量のレベルでは、報告される自殺企図の確率は、貧困ではない地域よりも、貧困の地域で、2 倍の高さであり、自殺を試みる確率は約 4 倍高かった。背景の脆弱さを統制後に、地域の貧困は、自殺企図と自殺の試みとにかなり関係したままであった。これらの関係は、後期青年期の心理社会的リスクによっては説明されなかった。むしろ、貧しい地域に住んでいる若者は、不利な条件に置かれた地域でのその他のリスク要因の拡大を通して、より大きな危機になるかも知れない。

Mistry ら(2009)によれば、短期縦断研究によって、3 年の間隔において、若者の学校での達成(GPA)に関して、標準的なテストの点数と教師の成績評価の若者の成績と、同時の母親と教師の教育的期待の影響を調査研究している。参加者は、T1 で 6 歳から 16 歳の 426 人の低収入の都会に住む民族的に多様な若者であった。交差遅れ自己回帰パス分析から、大人の期待、若者の標準テスト得点、母親ではなく教師の交差遅れの影響、時間にわたっての期待、T2 での大人の期待に関する若者の成績の結果での安定性が示された。全体的に調査結果のパターンから、大人の教育的期待はダイナミックであり、若者が学校でどのようにやっていき、時間にわたって成績での変化に敏感であることが分かった。

Trampush ら(2009)は、児童期 ADHD の有無で、都会の青年男女での高等学校中途退学と関連する認知的、心理社会的要因を調査することを目的に研究を行っている。縦断研究には、中途退学あるいは卒業した 49 人の児童期 ADHD の青年男女か若い成人と、44 人の統制群の者が含まれていた。中途退学の潜在的関連として調査されたリスク要因は、知性、読む技術、社会経済的状況、マリファナ使用、父親との接触であった。低い IQ、読む能力、社会経済的状況、頻繁なマリファナ使用、限られた父親との接触が、児童期 ADHD と関わりなく、かなり卒業と中途退学を識別していた。追跡調査の分析から、IQ、マリファナ使用、父親の接触は、独立し

て、中途退学の可能性に関与することを確定した。選択された認知的心理社会的要因は、ADHDに関わりなく、高等学校中途退学の可能性と独立に関連していると考えられる。特に児童期ADHDは、このリスクを増加させず、ADHDのために中途退学が増加したという先行研究は類似した地域社会の統制と一致させたとき、都会の地域では否定されるかも知れないことを示唆している。

Mallinson(2009)は、移行、サポート、中途退学に関して、脆弱な生徒と教師のサンプルの考え方を継続教育から展開している。教育、雇用、訓練には置かれていない(NEET)若者についての最近のスコットランドの法律に関心があった。質問は焦点化された集団で行われ、記録され筆記された。データは、良い情報、積極的な態度、学習と教育、機会というテーマに導かれる基本理論を用いてコード化された。イントロダクション、コースとの一致、社会的、財政的、未熟さ、学習上の問題に関連する中途退学の理由を生徒は示唆していた。中途退学を減少させ、効果的な学習を促進する目的で、生徒の反発力を高める移行とサポート過程を改善する方法に関して提案がなされた。訓練を提供し、行動研究を進める際に、学校、継続教育大学、その他の機関と協働する際に、教育心理学者が戦略的に関与する領域にこれらは存在する。

Pagani(2009)によれば、学校契約の概念は大部分の中途退学理論で顕著に表れるが、その性質、コース、更に重要なことに、中途退学との関連でなされる経験的な研究はほとんどなされていない。学校契約の本来の発達に関する情報は、青年期の間に生徒の疎外を防ぐことに興味がある人々に大いにためになるものである。11,827人のフランス系カナダ人の高校生の縦断的研究のサンプルを用いて、別々に、そして、全体的な構成概念として、契約についての行動的、感情的、認知的指標をテストした。因子分析と構造式モデルを用いて、中途退学を将来を占うものとして、その貢献を評価した。全体的な契約は、確実に中途退学を予測していた。3つの特定の次元の中で、行動上の契約のみが予測方程式での重要な貢献をしていた。研究結果から、認知的心理社会的特徴を反映する学校契約の全体的多次元構成概念の堅固さが確認され、青年期の間に基本的な学校教育を完了しないリスクを確実に評価する際に、基本的な参加と応諾に起因する重要性を強調している。

3 school phobia に関する研究の概観

2009年のschool phobiaをキーワードに持つ文献342件のうち、関連の考えられる21件を取り上げる。国別では、アメリカ合衆国が16件、カナダが1件、オランダが2件、スイスが1件、アラブ首長国連邦が1件をここでは取り上げることとする。

Leigh(2009)は、現在の診断基準に基づく精神医学的症候群の最近の遺伝神経科学的研究を概観し、より適合する多軸的な患者指向の診断モデルを展開している。DSM-Iは、1952年に刊行されているが、精神医学的疾患をストレスの多い環境的要求に対する患者のパーソナリティの適応反応あるいは両極端と考えている。パーソナリティそのものは、体質と精神力学的展開により測定された。生物学的研究に対する患者の『純粹培養』を得るための研究診断基準に基づ

き、1980年には、この連続体モデルは理論的に明確な診断基準（DSM-III）に変わった『純粹培養』を用いた引き続く研究は、精神医学的症候群が児童期の養育、教育、目下の社会的サポートによって軽減される遺伝、児童期の心的外傷、最近のストレスにより決定される表現型連続体を表すということを示唆している。特定遺伝子xと児童期虐待xの最近のストレス相互作用が見いだされてきており、個々人の発達史と目下のストレスにより、相互作用をする脆弱遺伝子がどのように結果として精神医学的症候群になる、あるいはならないかのモデルとして提示される。マイナーではあるが持続的（神経症）あるいは行動の不適應形態（人格障害）を表すかも知れない脳状態に結果としてなるストレスや養育の早期の体験と相互作用している遺伝子によって連続体モデルが提案される。最近あるいは現在のストレスの付加は、大きな精神医学的症候群を促進するかもしれない。突然変異のような重篤な遺伝子の素因が大きな症候群を引き起こすのに十分かもしれない一方で、大きな精神医学的症候群は不安や警戒のような進化上適応可能な脳機能の調節不全として最も概念化されている。精神医学的診断の新しい多軸モデルが、このモデルに基づいて、次のように提案されている。例えば抑うつ症候群、精神病のような大きな精神医学的症候群、神経症、人格障害と孤立の徴候を含む現象学的な診断に対する第Ⅰ軸、例えば、遺伝、特定の脳形態学、研究所とイメージング研究に基づく特定の脳領域の機能的状態を幾つかを表す遺伝神経科学的診断に対する第Ⅱ軸、医学的疾患と条件に対する第Ⅲ軸、児童期、最近、目下のストレスに対する第Ⅳ軸、過去5年間及び現在にわたる知性、教育、学校と仕事、社会的サポート、機能の総合評価のような心理社会的資産に対する第Ⅴ軸である。

Nandiら(2009)によると、臨床上のエビデンスから、形態の異質性が、気分障害と不安障害の共通の予測因子であるかもしれないことを長い間、示唆してきているが、疫学研究からは通常、これらの結果を同種の実体とみなしてきている。一般的な人々の人生では、気分障害と不安障害の共通の異質性の潜在的パターンについて、疫学的なエビデンスを組織的に概観することを目的として研究を行っている。時間とともに（「徴候軌道」）、体験される（「徴候症候群」）徴候の性質あるいは徴候の広がり（形態）により異質性を調査している疫学研究を概観している。含まれるべき症候群の研究では異なった徴候のサブタイプを確認することが求められ、軌道の研究では追跡調査の少なくとも3つの流れの中で徴候の異なった縦断的形態を確認することが求められた。臨床に基づく研究や患者に基づく研究は、除外された。この分野の研究は、幼児期にある間は、気分障害と不安障害が徴候症候群と軌道とによって区別されるばかりでなく、これらの障害に伴う要因がこれらのサブタイプ間で変化するかもしれないという発達上のエビデンスが見いだされた。個人によって体験される徴候あるいは軌道のサブタイプの特性に遺伝的、環境的要因が影響を与える原因となる経路にこのことが反映するか、あるいは異なるサブタイプの個人が様々な環境要因に対する感染性において異なるかは、決定できなかった。一般的疾患の間での徴候において、併発疾患あるいは移行の問題には、ほとんどの研究は対処していなかった。これらの状況の多様性を理解することは、これらの一般的疾患のいくつかの

サブタイプと関係しているだけである予防可能な要因を特定することになるかも知れない。

Nakamura ら (2009) によると、治療処置結果の研究は、治療技術がいかにか、なぜ機能するかを調査者にはほとんど断言させてきてはいない。そのような変化過程を理解する最初の段階として、不安縮小に対する認知行動療法のコースの間に典型的に達成される肯定的な変化のタイミングを調査している。選択的不安障害と診断された 4 人の児童の相互多面基準デザインを用いて、子どもたちが 4 つの演繹的な断固とした治療処置シーケンスを進むにつれ、不安レベル、認知の誤り、治療結果が、繰り返し評価された。結果は、報告者、従属変数、各々の治療処置技術が達成された命令全体にわたって変化していた。児童の報告傾向は、親によって報告された傾向よりわずかに明らかであり、エクスポージャーが自己モニタリングと心理教育技術を完了した後に若干の、しかし、すべてではない肯定的な変化を誘発するための鍵となる要素であったことを示唆されるよりわずかに明白であった。

Dozois ら (2009) は、うつ病と不安の予防に対する診断横断的なアプローチの妥当性を述べている。予防的介入は一般的に個別に展開され、独立した構成概念としてうつ病または不安にしばしば焦点を当てている。それでも、これらの障害は、しばしば同時に起こり、いくつかの危険と脆弱さの要因を共有している。(1) 否定的な認知内容と認知過程、(2) 親の精神病理学と育児、(3) ストレスと対処、(4) 行動禁止と回避の 4 つの修正可能な危険因子を概説し、予防的戦略を提案している。これらの戦略の多くが既存の予防プログラムで適用されたが、予防的介入で強調することで重要かもしれないいくつかの危険因子は通常は目標とされていない。さらに、これらの障害を横断する修正可能な脆弱さの要因を理解し、目標とする予防に対する診断横断的なアプローチを採用することによって、予防的介入の有効性、概括と費用効果が、強化されるかもしれない。

In-Albon ら (2009) によると、認知のゆがみは、認知の偏り、機能不全であり不適応な生成物を生じる認知過程に関連するものである。情報処理の自動的側面は考慮される必要があり、これらの側面を調査することは自己報告以外の評価の形態が必要である。児童期の不安障害の異なるタイプにわたる認知の偏りの特性に焦点を当てる研究はほとんどない。画像刺激による強制された選択的反応時間の枠組みは、不安な状態にある子どもにおけるオンラインの解釈の偏りを評価するのに用いられた。分離不安障害 (SAD) の 71 人の、社会恐怖の 31 人の、精神障害のない 42 人の、5~13 歳の子どもの障害に特有の解釈の偏りを調査研究している。結果によると、不安のない子どもよりも SAD の子どもは、かなり不快で刺激的なものとして、曖昧な分離画像を評価していた。SAD で社会恐怖の子どもが不安のない子どもよりも更に否定的な仕方で曖昧な分離あるいは社会的画像を解釈しているということは支持されていない。あらゆる画像のカテゴリーに対しての反応時間での集団間の差異は見られなかった。

Bubier ら (2009) は、児童青年の不安障害と破壊的行動障害の間の関係の基礎となり、部分的に評価する過程を調べる発達上の展望を用いている。併発する不安障害と破壊的行動障害の進行を理解する一つの方法は、不安兆候と反応攻撃性のようなこれらの症候群に対する前駆ある

いは一部である兆候を調べることでであると提案している。これらの問題を最初は例えば不安障害や破壊的行動障害の症候群や障害レベル，次には例えば不安兆候や反応攻撃性のような兆候レベル，最後には不安兆候や反応攻撃性と関連する要因のような危険因子レベルで考える枠組みを用いている。不安障害と破壊的行動障害が共に起こる，反応攻撃性と不安兆候が共に起こる心理学的症候群の併発疾患を理解するために提案された様々な枠組みを適応している。より一般的な不安障害と破壊的行動障害と同様に不安と反応攻撃性に関する文献での相違を特定している。不安と反応攻撃性の関係がどのように臨床的に特定できる併発する不安障害と破壊的行動障害に進行するかを記述する概念的モデルを最後に提供している。

Nelson ら(2009)は，典型的に肯定的で過大でさえある自己認知を持つことは，4,5歳の就学前の児童にとっては，発達上は普通であるとしている。しかし，すべての子どもたちが早期児童期に肯定的な自己認知であるというわけではないので，早期児童期に自己認知，特に低い自己認知の発達に影響を与える要因を理解することは重要である。したがって，ここでは，社会的行動，引きこもりの下位群の自己認知と教師の評価との関係，就学前の児童での受容と拒否について，仲間の評価を調査研究している。参加者は，アメリカ合衆国西部の中規模の地域社会の二つの早期児童期のプログラムに参加した107人の男子，92人の女子，計199人であった。主な研究結果は，仲間よりも低い能力についての自己認知である早期児童期の児童が，より多くの寡黙，孤独な受動的引きこもり，孤独の活動的な行動に関わりがちであるということであった。

Simon ら(2009)によれば，不安障害は非常に一般的であり，個々のレベルと社会のレベルで，否定的な結果が起こる。ここでは，小学生の不安障害に対するスクリーニングの有効性を調査研究している。より詳しくいえば，不安障害を識別し予測するスクリーニング法の価値を研究している。子どもの情緒障害に関する児童不安スクリーニング(SCARED-71)のスクリーニング質問紙での自己報告が上位15%以内か次の2つのポイントから(中間不安の)中央値以上の2ポイントまでの得点であれば子どもとその親を選択した。183人の高い不安の子どもと親，80人の中間不安の選択された子どもと親が，不安障害面接尺度(ADIS)の診断面接に参加した。高い不安の子どものうち，60%は不安障害であるのに対し，中間不安の子どもでは23%であったが，集団としては気分変調症や抑うつ状態，注意欠陥多動性障害の割合には差はなかった。不安障害を一般化した診断がどのような下位尺度でも予測されない一方で，対応するスクリーニング質問紙の下位尺度によって分離不安障害，社会恐怖，特定の恐怖症の診断が特に予測された。上位15%の分離を適用すると，不安障害の有無により子どもを識別する有用性をスクリーニング法が証明している。さらに，分離不安障害，社会恐怖，特定の恐怖症は，一般的で，児童不安障害を衰弱させるものと知られているが，スクリーニングの手段の対応する下位尺度によって予測することができる。

Dubi と Schneider(2009)は，児童のために立案され，新しく開発された絵画不安評価，絵画不安テスト(PAT)の心理測定特性を調査研究している。臨床的には不安状態で健康面では統制

された 71 人の 5～7 歳の児童が、他の刊行されている不安尺度と PAT を比較する評価に参加した。子どもたちの評価は、親の内在化された、また外在化された問題の評価とも比較された。PAT は高い内的一貫性、関連する構成概念を伴う高い収束有効性、診断群と事前事後の治療処置の間の高い判別妥当性に対する節度を含むこれらの対象者での好ましい心理測定特性を示していた。最初の研究結果によれば、幼い児童での児童不安と回避を評価する心理測定的にしっかりとした手段であり、不安を抱えた児童と共にいる臨床医に対する既存の診断手段に対する価値ある付加手段である。

Micco ら(2009)は、不安障害とうつ病性障害を現す子どもたちの間で全体的なリスクを決定することを目的として、不安障害の親を持つ子の中での精神病理学の広がりや調査研究するメタ分析を行っている。危機的状態にある子どもの中でのこれらの障害に対する蓄えられた確率比率が、精神医学的、非精神医学的に統制された子どもと比較され計算された。3 件の追跡調査を含む 16 件の文献が特定され、4～25 歳の 1,892 人の子どもが含まれていた。結果から、(1) 不安障害の親の子どもは、非精神医学的統制群の子どもよりも不安障害とうつ病性障害についてより多くのリスクがあり(それぞれ $OR=3.91, 2.67$)、精神医学的統制群よりも不安障害に対してより多くのリスクが存在する($OR=1.84$)。(2) 不安障害の親の子どもは、非精神医学的統制群の子どもと比較して不安障害の各タイプと MDD であるかなり高い確率がある(OR が $1.96\sim 8.69$ の範囲)。(3) 不安障害のみ、不安障害と MDD、MDD のみの親の子どもは、障害のない親の子どもよりも不安障害とうつ病性障害である同程度の確率であるがかなり高い確率であった。結果から親の不安障害は子どもの不安障害とうつ病性障害にかなり高いリスクを与えていることを示唆している。特定の親の不安障害の間に差異があるかどうかを調査するにはさらなる研究が必要である。

Knell(2009)によると、認知行動遊戯療法(CBPT)は特に幼児のために立案された発達上の適切な治療処置である。CBPT は、認知療法(CT)の申し子である。CT は行動の基礎となる思考や認識を変えることによって個々人が行動を変えるのに役立つ構造化され焦点化されたアプローチとして、発達したものである。CT はことばの介入を強調し、遊戯療法は遊びに焦点を当てており、多くのものには相容れないように思われていた。CBPT は、場面緘黙、不安や恐怖症、失禁のような広範囲の診断のある子ども、性的虐待のような外傷的な人生の出来事を体験したような子どもに用いられる。CBPT では、セラピストが子どもに学ぶことを望んでいる行動を示しているおもちゃによって、子どもに適応可能な対処技術をモデリングが示すのに用いられる。CBPT 治療介入は、行動か認知のいずれかとして分類される。行動の方法は通常、活動での変更と関係し、認知の方法は思考での変化に関係する。CBPT もモデリングのように経験的にサポートされた技術を取り入れている。治療での子どもの関係を強調し、統制、支配、自分自身の行動の変化に対する責任の問題に対処する。CBPT は構造化され目的指向のある活動を提供し、子どもがセッションに自然発生的な材料を持ち込むことをさせるものである。

Drewes 編(2009)によると、遊戯療法と認知行動療法を合わせ、遊戯療法と認知行動療法の統

合に焦点化させ、証拠に基づきその他の効果的治療処置と技術を論じている。児童青年の治療処置における多くの必要性について述べ、個人の知識と技術開発を増し、遊戯療法と認知行動療法を効果的に合わせられる遊び、遊戯療法、ベースとなる戦略の利点のより大きな認識を示している。

Cohen と Mendez(2009)は、年度をまたがった未就学児の仲間との遊びの行動の安定性と感情規制、受容的語彙、社会的能力欠損の軌跡との関係を調査研究している。参加者は、Head Start に参加している 331 人の未就学児で、主としてアフリカ系アメリカ人であり、低い社会経済的背景の出身であった。仲間との遊びの行動は、秋から春まで適度に安定していた。分析から、秋の感情的な不安定さは一貫した不適応と減少している社会的能力に関連していた。更に、安定した不適応行動を示した子どもは、一貫した適応行動を示した子どもより、秋において比較的低い受容的言語技能と感情規制であった。仲間との遊びの間、外在化された行動と内在化された行動を併存する未就学児は、仲間と比較して、その年度のコースにわたって、一貫した仲間との遊びの困難さと減少する社会的能力に対する最も大きな危機を抱えていた。ここでは、幼児教育体験登録の直後に危機的状態にある未就学児を特定する実践を示すものである。更に、研究結果によれば、効果的な治療介入がなければ、危機的状態にある子どもは、時間と共に、一貫した貧弱な社会的能力を示すことになる。

Feifer(2009)によると、子どもを悩まし、学校や社会でのスキルの困難さにつながる無数の不安のもととなる状況がある。子どもの双極性障害、双極性障害の神経的基礎、反応攻撃性と双極性障害、双極性障害に対する治療処置の不随事故、小児不安障害、社会不安障害、強迫性障害、心的外傷後ストレス障害、ボトムアップとトップダウンの不安障害を調査研究している。

McCloskey ら(2009)は、認識、感情、認知、行動、情緒障害にどのように実行機能が関係するかにきっかけを与え方向づけをする際の実行機能の役割を論じるための枠組みを提供する実行機能のすべてに関わるモデルを表そうとしている。情緒障害を呈している子どもの実行機能欠損を表す治療介入戦略と、情緒障害を体験している子どもの実行機能欠損の評価に対する実行機能関係と方法の見通しから情緒障害の診断を論じている。子どもの情緒の様々な表現と情緒障害に関すると考えられる感情と情緒障害を構成し、その実行機能を表す特定の前頭葉神経回路についての議論を取り上げている。

Leyfer ら(2009)は、ウィリアムズ症候群 (WS) の子どもの不安障害の広がり、年齢の最も近い兄弟と母親について、これらの集団の不安の予測因子と同様に調査研究している。不安障害の広がりが評価され、一般的な人々と比較された。WS の子どもは、一般的な人々の子どもよりも、特定の恐怖症、全般性不安障害 (GAD)、分離不安障害の広がりがとりわけ高い。母親は統制群よりも高い全般性不安障害の広がりがあるが、WS の子どもの誕生後の発症があった母親により、過剰が説明された。兄弟は一般的な人々と同様の割合であった。調査結果のこの形態は、欠損が不安障害の素因となる WS 領域の遺伝子の存在を示唆している。WS で欠損となる遺伝子と不安障害にそれ以前に関係する遺伝子の関係を調査することも価値がある。

Davis ら (2009)によると、精神疾患の分類と診断の手引き第4版 (DSM-IV-TR,アメリカ精神医学会(2000))には、子どもにおいて診断される1ダース以上の不安障害と恐怖症が存在する。大部分のこれらの障害には、当惑や仲間の必要性からの広場恐怖、治療介入の場合のように(参照 DSM-IV-TR), 社会的状況や学校での状況での治療介入を必要とする基準を含んでいる。診断群として、これらの障害は、社会的引きこもり、内気、問題のある仲間関係、親子関係の困難さ、スキルの欠損、認知のゆがみを含む様々な社会的困難と関係している(Elizabeth ら,2006;Ollendick と Hirshfeld-Becker,2002;Rapee と Spence, 2004;Spence, Donovan, と Brechman-Toussaint, 1999)。不安障害は、これらの障害の子どもに否定的な汚名も投げつけている(Jorm と Wright,2008)。さらに、不安障害の子どもは、差別と犠牲にも苦しめられている(例えば, Storch ら,2006)。結果として、不安障害の子どもの社会的スキルと社会的行動での困難さの評価と治療処置は、社会恐怖以外では、相対的に小さな注目を受けたことは驚くべきことである。例えば、子どもの不安に対する証拠に基づく治療処置の最近の概観では、ソーシャルスキルトレーニングには、概観に対して選択された18の治療処置選択の最小に含まれた成分、治療処置プロトコルの10%未満しか含まれていなかった(Chorpita と Southam-Gerow,2006)。ここでは、不安障害の相互作用と社会恐怖に特定の関心を伴うソーシャルスキルの困難さを調査している。概観された話題には、不安障害の子どもでのソーシャルスキルの欠損の評価と治療処置と同様に不安障害の子どものソーシャルスキルの問題の独特の影響が含まれている。

Jewell ら(2009)は、子どもが体験する様々な発達障害や心理学的障害を概観している。初めにこれらの障害の関連する兆候を、次にソーシャルスキルがどのようにその障害に関連するかを理解しようとしている。ソーシャルスキルの欠損が病因学的に理解されるかどうか、あるいはこれらの欠損がむしろ障害の行動的結果であるかどうかを問題としている。特に、ソーシャルスキルの欠損はしばしば特定の障害の診断基準か障害自体の直接的な結果のいずれかあるいは双方である。ソーシャルスキルの欠損は、障害とともに起こる。しかし、場合によっては、先のソーシャルスキルの欠損が障害の兆候に先行し、障害の病因の一部であることを示唆する証拠がある。これは鶏が先か卵が先かと同様に、障害が先かソーシャルスキルの欠損が先かということである。第2のテーマは相互関係である。ソーシャルスキルの欠損と障害の間の指向性の関係にもかかわらず、これらの欠損は障害の維持を通常支えることになる。したがって、多くの障害で、社会的領域での能力の欠如は、障害の重篤さ、併発する障害のより大きな危険性、より劣った予測に関連する。たとえば、抑うつ性のエピソードに先行するより大きな社会的ネットワーク、行動への頻繁な関与、社会的能力のより多くのレパートリーのある抑うつ性のエピソードに入る青年男女は、長さとしては比較的短く、慢性的にはならぬような比較的穏やかな抑うつ性のエピソードを体験する。この場合、抑鬱性のエピソードの始まりより前の個人のソーシャルスキルは、障害に対する保護的要因として用いられる。特定の障害に関連するソーシャルスキルの欠損を理解することは、同様に防止と治療介入プログラムを計画する際に重要である(Spence, 2003)。。ソーシャルスキルトレーニングが、様々な障害を治療するには

単独では十分ではないと結論づけられる一方で、ソーシャルスキルはしばしば様々な多面的な方法の予防的治療介入プログラムの要素である。どの特定のソーシャルスキルが指定される必要があるかどうかを理解することは、治療処置あるいは予防しようとしている特定の障害によるものである。いくつかの積極的ソーシャルスキルが実際にいくつかの障害を同様に維持させる一方で、障害に関連があると仮定されたいくつかのソーシャルスキルが相対的に関連がないと示唆されるいくつかの驚くべき直観に反した結果を記述する調査研究も概観している。

Jaju ら(2009)によると、アラブ世界の青年男女と若者の間では精神障害の程度を調査している調査研究が不足している。オマーンでの第 2 段階の調査研究は、生涯にわたってと生後 12 ヶ月以上での DSM-IV の精神障害の広がり、発症の年齢分布を決定し、世界保健機構の統合国際診断面接(WMH-CIDI) を用いて過去 12 ヶ月間の重篤さを決定する最初の国家を代表する学校ベースの研究である。多段階で、多層化された任意にサンプリングされたデザイン(第 1 段階)による第 2 段階の任意の下位サンプルを形成する 1,836 人の生徒から合計 1,682 人(91.61%)の生徒が WMH-CIDI3.0 のアラブ版を用いた面と向かっての構造化された面接に参加した。一般健康検査(GHQ-12)と児童抑うつ尺度(CDI)を用いた第 1 段階の結果から、5,409 人の青年男女と若者の比較的大きなサンプルで、抑うつの兆候が 17%の広がりが示された。このサンプルからの第 2 段階の回答者の 13.9%には、少なくとも一つの DSM-IV 診断表記が見られた。大うつ病性障害(MDD)の生涯にわたる広がり、3.0%であった。すなわち、双極性気分障害(BMD)は 1%、特定の恐怖症は 5.8%、社会恐怖は 1.6%であった。女性では、MDD (OR3.3, 95%CI 1.7-6.3, $p = 0.000$) の生涯にわたる危険性の強い予測因子であった。すなわち、任意の気分障害 (OR2.5, 95%の CI 1.4-4.3, $p = 0.002$) であり、特定の恐怖症 (OR1.5, 95%の CI 1.0-2.4, $p = 0.047$) であった。12 ヶ月の DSM-IV 障害で診断されるケースに対する疾患の重篤さは、女性では 80%以下であることが分かった (OR0.2, 95%CI 0.0-0.8)。生涯にわたる広がりと比較すると、以前の 12 ヶ月の期間にわたる評価は、MDD, 特定の恐怖症, 任意の不安障害(ADD), 任意の気分障害(AMD)に対して、25%から 40%以下を示し、その割合は、分離不安障害と成人の分離不安(SAD/ASA)に対して 80%以下であった。気分障害は、比較的年齢の高い集団と比較して、14 歳から 16 歳の集団ではかなり低く(70%以下)、AMD は年齢が増加している集団にわたって、1 次関数的な増加を示していた($p=0.035$)。この調査研究の結果の意味は明確ではないが、精神障害が人生の早い時期に開始するという成人の CIDI の研究結果を支持するものである。DSM-IV のうつ病性障害の比較的低い発症率は、同じ期間での同一サンプルの中で、抑うつ症状だけの排他的な研究に基づく誇張された結果についてのどのような断定的解釈に対しても警告を発することになる。女性では、MDD, 任意の気分障害, 特定の恐怖症の生涯にわたる危険性の強い予測因子であることが分かった。男性やその他の性別による特定要因による過小報告が、そのような矛盾に貢献したかも知れない。12 ヶ月の DSM-IV 障害によるケースに対する疾患の重篤さの確率は、女性ではかなり低いものであった。

Van Dyke ら(2009)によると、分離不安障害(SAD)は児童青年に影響を及ぼしている最も一

一般的な不安障害のうちの1つである。文献の現在の状態は、SADに対する個別の、また集団の認知行動療法(CBT)の効果を裏付けるものである。更に、投薬試験では、一般の児童不安障害の治療処置において、特定の薬理学的エージェント、特にSSRIの有効性の証拠が得られた。これらの最近の臨床上の進歩にもかかわらず、若者の集団は、依然としてその兆候によって苦しめられたままであり、相前後してCBTと薬物治療の療法を取り入れる併用療法アプローチの考察を正当化している。いくつかの親子の要因が、手に負えない病気のコースと、伝統的なCBTによる治療処置に対する貧弱な反応となると経験的に特定されてきた。これらの研究結果から、特に手に負えないケースを伴う継続的な研究と臨床試験の必要性が見いだされた。クライアントにより特有の治療処置計画を手直しし、これらの若者に対する最終的には治療処置の結果を改善する際に用いられる新しい治療処置技術を明らかにするものである。

SchoenfieldとMorris(2009)によれば、近年、児童青年での不安障害を治療する認知行動の方法の有効性を調査している研究の急速な増加が見られた。調査研究によれば、不安障害がさまざまな仕方で、子どもの日常的な機能に影響を及ぼし、成人期に否定的な結果に潜在的につながるようになることを示唆している。児童期不安障害に対する治療処置の方法の有効性を評価した多数の調査研究が発表されている。かなりの共通部分が不安の多くの条件の病因学と徴候学に存在するが、治療処置に対する意味のある重要な識別もある。たとえば、CBTの方法が社会不安障害、分離不安、全般性不安の兆候を扱う際に、おそらく有効であるとわかっているけれども、特定恐怖に対する効果的なCBT治療介入では、限られた経験的なサポートとなっている。CBT治療介入の主な目的は、子どもが自分の不安のサインと兆候を認識することを学ばせ、兆候を減らすか、排除する対処戦略を用いることである。文献で論じられるすべてのCBT治療介入の徹底的な概観を提供することは、この範囲を超すものであるが、学校、臨床、地域社会環境で実行する見込みを示す4つの特定の治療介入の徹底的な概観を提供している。

4 school refusal に関する文献

2009年のschool refusalをキーワードに持つ文献208件のうち、関連の考えられる18件を取り上げる。国別では、アメリカ合衆国が11件、カナダが1件、オランダが2件、日本が2件、アイルランドが1件、英国が1件、ここでは取り上げることにする。

Weeksら(2009)によると、社会不安は社会的状況で他人によって否定的に評価されることへの恐怖である。児童期の社会不安の大部分の先行研究は、10才以上の子どもたちの臨床サンプルを用いてきている。ここでは、児童の任意抽出サンプルにおける社会不安の相関物を探査している。関係者は、7~8歳の2年生178人の小学生たちであった。子どもたちは、社会不安尺度改訂児童版(SASC-R)を、社会適応尺度と同様に個別に行った。教師は、児童の社会的感情的問題と学校適応の尺度を行った。結果によると、社会不安が自己申告の孤独、学校回避と内在化している対処とに明らかに関係し、否定的に学校嗜好に関連することが示された。しかし、社会的不安は、大部分は先生に評価される結果とは無関係であった。調査結果は、この種の人

々に対する SASC-R の使用と調整結果の児童および教師の報告の相違の理由に関して論じられている。

Hunt ら (2009) によると、無断欠席は、若者の間での大きな問題である。都会での無断欠席を研究することの歴史的強調を考慮すると、調査結果の文化的な概括を調べるためには、協調した努力が、農村地帯のこの研究を広げるために必要である。この研究の目的は、アパラチア山脈の南地方の地域で高等学校に通学している生徒のサンプル 367 人で、無断欠席と関連した変数を評価することである。主な目的は、成績、信仰、環境要因（家族構造、親の教育、家族機能の青年期の認識）、内在化している問題（不安、抑うつ状態、思考問題、注意すべき問題）、外在化している問題（薬物乱用、ルール破壊行動）、凡社会的な明確な行動（学校とリーダーシップ行動）という変数の相対的な予測強度を評価することであった。回帰分析から、無断欠席が貧弱な成績、増加した抑うつ状態、社会問題とかなり関係し、より教育を受けていない母親、より体系化されていない家庭環境、比較的高い学年、学校スポーツへの少ない参加を伴っていた。これらの調査結果は農村地帯で無断欠席を理解する上で重要であり、無断欠席の危険がある若者を対象とする組織的防止プログラムによって特定され、取り上げなければならない関連する要因を焦点化するものである。

Friedberg ら (2009) は、開業している認知行動療法の臨床医に、児童とセラピストに比較的容易で有効な実践を行う広範囲の技術と手順を提供している。「児童青年の認知療法の臨床的実践:要点」(Friedberg&McClure,2002)という以前の著作の姉妹本としてデザインされている。最初の本は、治療処置の基本を示している。ここでは、目標に到達するのが難しい患者、取り扱うのが難しい問題、一層複雑なケースを対象とする多くの技術とアプローチを著そうとしている。患者に適合する正しい技術を臨床医に選択させるモジュール的アプローチを提供している。経験的に支持された治療処置マニュアルと典型的な臨床的実践で見いだされることの間のギャップを埋めるようになっている。

Moore ら (2009) によれば、ストレスの多いできごとについての人々の恐怖に関連する気質と期待の統合については比較的ほとんど分かっていない。参加者の不安感度とできごとの期待がどのように社会不安を決定する上で集積されるかを研究するため、情報統合理論を用いている。2 件は大学生と 1 件は不安の臨床患者との 3 件の研究が行われ、参加者には社会的に気まづいできごとの複数のシナリオが提示され、それぞれにはできごとの可能性の異なる程度が表され、そこから主観的な期待が引き出された。独立変数には、不安感度（低、中、高）とできごとの期待（低、中、高、可能性情報なし）が含まれた。参加者は、この 3×4 の組み合わせの準実験的なデザインで各々の期待状態での彼らの不安(従属する尺度)を示すように問いかけられた。全 3 件の研究の結果から、不安感度とできごとの期待が社会不安をもたらす上で加算的に集積されることが強く示唆された。不安に関連する障害の治療処置に対する更なる結果と意味についても議論されている。

Manassis (2009) は、アカデミックセンターでの実践としての児童認知行動療法 (CBT) と地

域環境での利用の間の隔たりの橋渡しをしている。CBTは、様々な子どもの精神健康の状態の治療処置での「黄金の基準」と考えられ、数多くの無作為の対照化試験で評価され、特に不安障害やうつ病性障害のような、ある種の障害に対する基準を満たしている子どもにCBTを行うことへの圧力にしばしば開業医は直面している。心の中で子どもたちによって書かれ、治療処置ではしばしば詳述されず地域の開業医に非常に関連する児童 CBT の評価と治療処置の問題を説明するために段階的で実際的なアプローチを用いている。CBT の地域での実践に適応させる面を例示するために、臨床経験とスーパーバイズを伴う経験的な研究から情報を集積している。CBT は経験的に確認された治療処置であるが、多くの研究上の問題は未解答のままである。情報の経験的な基礎をはっきりさせるため、何が知られているかについて指定し、読者がテストされ、発表された調査と報告された考えを明らかに区別することができるようにした。

Lancioni ら(2009)は、知的障害で子どもの適応可能なソーシャルスキルの評価に対して用いられる一連の評価尺度を概観し、これらの子どもに適応可能なソーシャルスキルを促進する治療介入戦略の例を示している。

Wagner ら(2009)は、児童青年の精神障害の精神薬理学に焦点を当てている。一方で、精神薬理学ではない治療処置介入も児童の精神医療の重要な構成要素である。個々の心理療法、集団療法、家族療法は、臨床的結果を改善するかも知れない。教職員と密接に行動を共にすることは精神障害のある子どもの治療処置のもう一つの要素である。子どものためのケース管理と家族に対するサポートは、子どもの治療処置のその他の側面である。臨床医が児童青年の向精神薬物の使用に対して証拠ベースに気づいていることは、重要である。文献のデータから、統制された研究に焦点を当て、提示される。これらの調査結果に基づいて、児童期精神障害に対する薬物療法に関する臨床的推薦が提供される。

Sauter ら(2009)によると、青年期の不安障害は一般的で破壊的であり、この年齢層に対して効果的な治療処置が必要である。認知行動療法(CBT)は、青年期の不安に対する最も一般的な治療介入の一つであり、その適応に対しては経験的なサポートがある。しかし、かなりの青年期のクライアントは治療処置後に不安兆候を報告し続けている。治療処置効果を高める努力において、治療処置を立案し、実行するときに青年期の期間の独特の発達上の特徴に対応する必要性を強調している。発達心理学、発達精神病理学、臨床児童青年心理学から文献によって知らされ、不安のある青年男女に対する発達上適切な CBT の「なぜ」と「どのように」について概観をしている。不安のある青年男女に対して立案され実行される CBT での発達上の要因を考察することが重要である「なぜ」は、CBT の関わりに関して、認知能力を含む治療処置の結果研究の年齢に関連する研究結果を調査し、発達上の要因の影響を展開することである。治療処置のデザインと実行の6つの鍵となる領域で不安のある青年男女にとって臨床医が発達上 CBT に適応できる「どのように」について、臨床的に研究指向の文献の双方から描かれた示唆によって記述される。

O'Connell ら(2009)によると、児童、青年、若い成人の間での精神健康障害と薬物乱用障害

は、しばしば成人期まで存続する大きな脅威である。影響を受けた個人、家族、社会に非常な負担を生じるこれらの障害に対する治療処置の費用は、発症を防ぐか障害の重篤さを軽減するか予防の実践に対する関心を増やしている。予防の実践は、精神健康の必要性のある人々に向けて立案された地域のサービス、学校を基盤とした治療介入、選択された危機的状態にある人々に対するプログラムを含む、様々な状況で現れている。予防科学、精神健康、教育、薬物乱用、青少年裁判、健康、児童青年の発達における研究者と政策立案者は、この最新の情報と障害の予防と精神健康の分野に対する示唆された方向性によるものである。

葛西(2009)によると、日本での自己の概念を知らせる重要な文化的信条の議論から始め、日本の心理学的問題、日本でのカウンセリングへのアプローチ、臨床心理とカウンセリングの心理学での現代的問題の議論を行っている。P.A.での要約では、多くの部分を日本の紹介に充てているが、この論文の中での要点がこれでは十分にアブストラクトを読んだ者には伝わりきれない可能性がある。葛西に依頼することで論文本体の入手をし、検討することができた(葛西の論文本体、参照)。

Broeren ら(2009)は、4~9歳の226人のオランダ人の子どもの非臨床的サンプルを用いて、認知発達、恐怖、不安、行動抑制の関係を調査研究している。認知発達を評価するために、子どもはピアジェの保存課題と心の理論(TOM)のテストを行った。恐怖は子どもによって完成された自己報告尺度によって測定され、不安兆候と行動抑制は親によって記入された評価尺度によって測定された。重要な年齢傾向は、いくつかの不安現象に対して観察された。例えば、比較的幼い子どもは比較的高い恐怖得点を示したが、年長の子どものは全般的な不安の比較的高いレベルを示した。最も重要なことは、年齢について統制をした回帰分析の結果から、認知発達、特に心の理論の能力が、様々な行動抑制の領域に対して、独特で重要な寄与をしていたことが示された。すべてのケースにおいて、心の理論の比較的高いレベルは、行動抑制の比較的低いレベルと関連していた。一般に説明された相違のパーセントはむしろ小さく(例えば、6%未満)、様々な不安現象での認知発達の役割が制限されていることが示された。

Owens ら(2009)によると、小児不眠症は、児童青年に一般的なものであり、医学的、精神医学的、神経発達の障害の併発疾患のある子どもでは特に、重要な介護者の負荷に結果としてつながる認知的、情緒的、心理社会的障害と関連するかも知れない。小児不眠症にはいくつかの行動的治療介入が効果的であるが、薬理的治療処置の使用をサポートする経験的な証拠の相対的な不足がある。鎮痛剤や催眠薬は小児不眠症を治療するために臨床実践で多用されており、特定の薬物投与のためばかりではなく、一般的なこれらの薬物使用に対するガイドラインが展開されてきている。最も一般的に処方されている薬理的な薬剤の様々な種類に焦点を合わせて、臨床実践におけるこれらの薬物使用に対する専門的な同意のガイドラインを表している。

Reid ら(2009)によると、小児期不眠症(CI)は誕生以降最初の20年全体で現れ、重篤さが広範囲であり睡眠に関連する問題の多様なグループである。均質ではないCIの起源については、ほとんど理解されていない。それにもかかわらず、比較的若年の子どもに対する効果的な治療

処置が有効であることが示された。発達の様相の範囲内で定められ、最初の 20 年間の共通の対応物と CI の原因を概観している。子どもと若者の不眠症の評価と治療処置に対する実践的アプローチを概観している。

Carr (2009)によると、2001 年に家族療法ジャーナルで刊行された類似した文献を更新している。様々な困難を抱えた児童青年の家族に対して、システムチックな治療介入の有効性に対するメタ分析、システムチックな文献概観、統制された試みから証拠を提示している。システムチックな治療介入には、親の訓練のような家族療法やその他の家族に基づくアプローチが含まれている。睡眠、幼児の食事とアタッチメントの問題、児童虐待とニグレクト、児童期の行動上の困難さ、ADHD や薬物乱用を含む行動上の問題、不安、抑うつ状態、悲しみ、双極性障害と自殺傾向を含む気分上の問題、拒食症と過食症、肥満を含む摂食障害、遺尿、大便失禁、再発する腹痛、十分に制御されていない喘息、糖尿病を含む身体上の問題に対する単独あるいは多モードのプログラムの一部としてのシステムチックな治療介入の有効性を証拠はサポートしている。

Arvans ら (2009)によれば、片頭痛に対する心理学的治療介入は、一般的にバイオフィードバックトレーニング、ストレス対策トレーニングまたは緩和トレーニングが含まれ、片頭痛または片頭痛に対する不満を持続するかもしれない環境変数の考慮なしで実行されている。登校状況に否定的な影響を与えた片頭痛の毎日の報告がある若者が、親と治療に参加した。片頭痛の不満の機能的評価が、参加者とその母親で実行された。片頭痛の不満の機能が仕事と学校からの離脱であるという仮説を展開後に、差別的強化と離脱消滅が、満たされた。結果によると、標準的な心理学的治療介入が効果がなかったときでも、片頭痛の報告が機能に基づく治療介入を用いてうまく治療処置ができ、地形学に基づいて治療処置をするよりはむしろ、問題の機能を考慮することの重要を例示している。

Herbert ら (2009)によると、社会不安障害 (SAD) の早期の特定と治療処置は、兆候の慢性的な過程、持続的な機能障害、進行性の精神医学的併発疾患の進行を防止する上で、重要である。小さいが発展的な文献は、思春期においては SAD を含む不安障害に対する認知行動療法 (SAD) の有効性を支持している。無作為対照化試験は、特定の CBT 要素を含まない教育的支持的心理療法に関して、全般性社会不安障害の青年男女に対するグループと個別の CBT の有効性を評価している。3 つの治療処置すべては、兆候と機能障害、改善されたソーシャルスキルでの重要な減少に関連していた。治療処置間での差異は兆候での尺度では現れなかったが、CBT の条件は行動上の尺度で大きな利得を示していた。

Goodlin-Jones ら (2009)によると、アクティグラフィイー (睡眠覚醒判定装置)によって測定された就学前児童の睡眠パターンと親に報告された多動性の兆候の間の関係を調査研究することを目的として研究を行っている。多くの先行研究は、注意欠陥多動性障害 (ADHD) 様の兆候の子どもの睡眠の問題を報告している。ここでは、自閉症の子ども、自閉症のない発達遅滞の子ども、一般の人々から補充された典型的に発達している子どもの 3 群の 186 人の 2~5 歳の就学前

児童の断面サンプルを調査研究している。アクティグラフィーの一週間の睡眠データとこの期間の睡眠の問題の有無について親の報告が収集された。介護者教師報告形式を記入した教師のある就学前児童の下位群の児童行動チェックリストを親は完成させた。睡眠行動は、注意欠陥多動性障害の症状の臨床レベル(T 得点 ≥ 65)の有無の児童のそれと比較された。結果として、すべてのサンプルでの親の規定する睡眠上の問題の広がり、36.1%であった。サンプルの34%では、臨床範囲での親の報告によるADHD複合物であった。臨床ADHDプロフィールのある児童は、睡眠上の問題があると親に記述されがちである。しかし、臨床範囲でのADHDプロフィールのある児童に対して、アクティグラフィーの睡眠パターンや夜から夜への睡眠覚醒変動での重要な差異は見られなかった。結論として、就学前児童のこの非臨床的サンプルでは、臨床的ADHDプロフィールの親の報告は睡眠の問題の親の報告とかなり関連があるが、アクティグラフィーに記録された睡眠覚醒データとは関連がなかった。

Bambaら(2009)は、児童福祉の研究に対する文化発達上のアプローチを記述している。日本の児童福祉ワーカーが虐待された児童の幸福をサポートしようとする日常の社会化の信念と実践を文化的な関係において記述している。度重なる個々、グループの面接、自然主義的観察、治療介入を通して、3つの相互関係の概念、居場所(平和、安心、受容、所属を感じる心理学的幸福に必要な場所)、安心感(安心の感覚)、見守り(保護的な態度として注意深く他者によって見られる実践)が、虐待された子どもとの実践において、大人にとって重要なものとして現れた。大人は、組織の中で子どもの居場所を作る際に、子どもの安心感の重要性を強調している。大人による子どもの見守りは、一般に参加者によって記述され、参加者の観察を通して文章化されていた。日常的な社会化実践としての見守りは、基本的に発達の生態学的である。子どもたちが自分の居場所を見つけることを含む発達上の機会を提供する、社会的情緒的支持的な関係を作り出している。子どもたちへの深い情緒的な関与と受容的關係は、成功した見守りに必要なものとして見られ、子どもの幸福をサポートする直接的な治療介入に優先するものであった。アメリカの児童福祉研究と実践への意味としては、多元的な社会の中で児童福祉における発達の生態学的考察を強化する上で当然のことと思う以外に踏み出す機会を含んで論じられる。

Leybaら(2009)によると、1906年に学校社会福祉部門が開始されてから、登校状況は専門職に対する懸念される問題のままになっている。ソーシャル・ワーカーは、長期欠席生徒調査官として、地域社会の社会的疾患、疾患と健康、安全な世帯所得の欠如、登校状況の効果を調査研究してきている。ここでは、登校状況の重要性、無断欠席に関連する危険因子、無断欠席の多面的要素、証拠に基づく学校社会福祉無断欠席介入について述べている。

Lee(2009)は、M. S. Thambirajah, Karen J. Grandison,と Louise De-Hayesによる登校拒否の理解について、概観している(2008-04045-000 参照)。登校拒否がより深い心理学的問題の指標にどのようななりうるかを文脈化し説明しようとしている。教師や教育のその他の最前線の専門家に対して記述し、登校拒否の問題を焦点化し、目下の調査研究の概略を説明することを目的としている。システム論、循環因果関係、登校拒否の生態学的交互作用モデルのようなカギとな

る概念が記述され、例示されている。現在の登校拒否研究の明確な記述と概略から始め、登校拒否を学校に登校する見通しでの感情的苦悩と定義することによって、登校拒否と無断欠席の明確な違いが存在する。個別のアプローチの重要性を認める一方で、構造化された治療介入プログラムを提供している。

Weissman ら(2009)によると、不安は、生理的、認知的、情緒的苦悩の兆候を特徴としている多次元構成概念である。最近の疫学的概観は、今日の児童青年に影響を与える最も一般的な精神医学的問題の一つとして不安を特定している。学校環境が子どもの感情的、知的、社会的成長にかかわる重要性のために、青年が学校で、大部分の彼らの起きている時間を費やすので、不安が機能している学校に影響を与える干渉に対する正当性と認められる懸念でもある。不安の現象学、その発展理論、機能している学校に関連した特定の否定的な結果、不安を評価する方法とこれらの懸念に対処する認知行動療法(CBT)プログラムを概説している。

Lang ら(2009)は、発達障害の個人での逃走の治療処置を必要としている研究の概観を行っている。3つの電子データベース、ジャーナル、参照リストの組織的検索から、包含基準を満たしている10件の研究を確認した。これらの研究は、以下の(a)～(e)に関して評価された。(a)参加者、(b)逃走を評価するのに用いられる手順、(c)治療介入手順、(d)治療介入の結果、(e)証拠の確実さである。10件の研究にわたって、3～47歳の合計53人の参加者に治療介入が提供された。評価手順には、逸話的なスタッフ報告、参加者面接、直接の観察、修正されたアナログの機能分析が含まれた。治療介入アプローチには、特異な強化、終息、機能的コミュニケーション・トレーニング、反応ブロッキング、非付随的強化、創造、予定の実践が含まれた。積極的な結果が、概観された研究の80%において報告された。証拠ベースは、例えば機能分析手順のような機能ベースの評価、例えば機能的コミュニケーション・トレーニングのような機能ベースの治療処置がこの人々の逃走の治療処置に最も効果的かもしれないことを示唆している。

LeCroy(2009)は、学校で効果的にソーシャルスキルグループを指導する方法に関する情報と議論をスクールソーシャル・ワーカーに提供している。学校は、子どものための主要な社会化施設である。学校で、子どもは学習上のスキルを学ぶと同様に、社会的行動を発達させる。適当なソーシャルスキルなしでは、子どもは将来、多数の否定的な結果に直面することになる。ソーシャルスキルグループは、適切な対処戦略により、積極的あるいは引っ込み思案な行動に置き換える社会に適合する能力を子どもに身につけさせる。たとえば、個人間のスキルは、仲間、親、権威的存在とのコミュニケーションを強化することを教えることができる。自己規制のスキルは、交替して指示に従うことのような学級での過程を強化することを教えることができる。多数の機会が、学校で、児童青年の十分な社会化を容易にする様々なスキルベースのプログラムの実行に対して存在している。子どもの学ぶ能力を高め、他者と十分に関わり、教師に対しては教育目標に焦点化させ、より良い達成に導くソーシャルスキルプログラムのデザインと実行において、スクールソーシャル・ワーカーは重要な役割を演ずることになる。

Ⅲ おわりに

2009年のPSYCHOLOGICAL ABSTRACTSにおける不登校に関連すると考えられる研究では、単行本の形で出版され、その中での章が文献として取り上げられているものも多く見られる。ここ数年の傾向として、特別支援教育で取り上げられている障害に関わる文献が増加してきている。不安障害、社会恐怖、行為障害、ADHD、自閉症スペクトラムなどに関する文献が多く見られているが、これらの重複障害、併発疾患についても取り上げられていることも近年の特徴である。様々な場面での認知行動療法を活用したケースも多く見られる。薬物やタバコの常用等の物質乱用と不登校の関連を取り上げている文献も見られるが、ここでは取り上げなかった。

インターネットでの掲載が容易になり、引用文献、参考文献をあわせて掲載する文献が多くなっている。文献を電子データとして保存をすることが普通となり、それぞれのキーワードに関わる文献数が著しく増加してきていることも近年の特徴である。

2009年のDIALOGデータベースでのPSYCHOLOGICAL ABSTRACTSでは、2010年6月現在で、school attendanceに関する文献が678件、school dropoutsに関する文献が230件、school phobiaに関する文献が342件、school refusalに関する文献は208件であった。2009年の検索文献総数は1,558件であり、このうち73件について取り上げた。検索文献件数は、1997年101件、1998年95件、1999年118件、2000年166件、2001年289件、2002年280件、2003年371件、2004年833件、2005年935件、2006年806件、2007年1,225件、2008年1,269件、2009年1,558件であり、文献数としては2007年から1,000件を超し、更に増加している。2004年以降の急激な増加が文献の電子化の普及と関連があると考えられる。直接的な関連がない文献は誌面の関係で取り上げていないが、各キーワード毎の経年変化については、2010年の文献を目途にまとめたいと考えている。増減については今後も注目していきたい。

2009年の文献の中では、これまでも日本人の文献は見られていたが、特に鳴門生徒指導学会員の葛西(2009)の文献がschool refusalの文献の一つとしてヒットしてきたことは喜ばしいことである。論文本体を含めての英語化は難しいかもしれないが、要約だけでも英語化することは英語圏の人たちが日本人の研究に目を向ける機会になるものと考えている。「鳴門生徒指導研究」のpdf化と併せて、英文の要約を鳴門生徒指導学会のホームページに掲載していきたいと考えている。

基礎研究としてのERICおよびPSYCHOLOGICAL ABSTRACTSの文献を用いた世界の不登校に関する研究の1年毎の概観は、19年目となる。2002年まで進めてきたERICの年毎の概観が、検索方法が変更され、できなくなっていることは残念であるが、PSYCHOLOGICAL ABSTRACTSの年毎の検索が可能であるので、基礎研究を継続してきている。日本における登校に関連する問題、不登校に関連する問題は解決してきているとは考えられず、更に特別支援教育との関連もあり、今後も2000年代の1年毎の概観のアプローチをしていく必要があると考えている。

文献

- Arvans, Rebecca K. et al. : Functional assessment and treatment of migraine reports and school absences in an adolescent with Asperger's disorder., *Education & Treatment of Children* , **32** (1) , 151-166 , Feb , 2009.
- Bamba, Sachiko; Haight, Wendy : The developmental-ecological approach of Japanese child welfare professionals to supporting children's social and emotional well-being: The practice of mimamori., *Children and Youth Services Review* , **31** (4) , 429-439 , Apr , 2009.
- Broeren, Suzanne ; Muris, Peter : The relation between cognitive development and anxiety phenomena in children., *Journal of Child and Family Studies* , 18 (6) , 702-709 , Dec , 2009.
- Bubier, Jennifer L. et al. : Co-occurring anxiety and disruptive behavior disorders: The roles of anxious symptoms, reactive aggression, and shared risk processes., *Clinical Psychology Review* , **29** (7) , 658-669 , Nov , 2009.
- Carr, Alan : The effectiveness of family therapy and systemic interventions for child-focused problems., *Journal of Family Therapy* , **31** (1) , 3-45 , Feb , 2009 .
- Cefai, Carmel; Cooper, Paul : The narratives of secondary school students with SEBD.,; Promoting emotional education: Engaging children and young people with social, emotional and behavioural difficulties., 37-56 , 192 , 2009.
- Ciarrochi, Joseph; Heaven, P. C. L. : A longitudinal study into the link between adolescent personality and peer-rated likeability and adjustment: Evidence of gender differences., *Journal of Research in Personality* , 43 (6) , 978-986 , Dec , 2009.
- Claes, Ellen et al. : Truancy as a contextual and school-related problem: A comparative multilevel analysis of country and school characteristics on civic knowledge among 14 year olds., *Educational Studies* , 35 (2) , 123-142 , May , 2009.
- Chen, Ji-Kang et al. : The perpetration of school violence in Taiwan: An analysis of gender, grade level and school type. , *School Psychology International* , **30** (6) , 568-584 , Dec , 2009.
- Crawley, Esther et al. : Anxiety in children with CFS/ME., *European Child & Adolescent Psychiatry* , 18 (11) , 683-689 , Nov , 2009.
- Cohen, Jeremy S.; Mendez, Julia L. : Emotion regulation, language ability, and the stability of preschool children's peer play behavior., *Early Education and Development* , 20 (6) , 1016-1037 , Nov , 2009.
- Crocker, Nicole et al. : Comparison of adaptive behavior in children with heavy prenatal alcohol exposure or attention-deficit/hyperactivity disorder., *Alcoholism: Clinical and Experimental Research* , **33** (11) , 2015-2023 , Nov , 2009.

- Daley, D. et al. : Attention deficit hyperactivity disorder in pre-school children: Current findings, recommended interventions and future directions., *Child Care, Health & Development* , **35** (6) , 754-766 , Nov , 2009.
- Davis, Thompson E. III et al. : Anxiety disorders and phobias., Matson, Johnny L. (Ed) ; *Social behavior and skills in children.*, 219-243 , ix , 333 , 2009.
- Don; Dunlap, Glen; Strain, Phil : Randomized controlled trial of the prevent-teach-reinforce (PTR) tertiary intervention for students with problem behaviors: Preliminary outcomes., *Journal of Emotional and Behavioral Disorders* , **17** (4) , 213-225 , Dec , 2009.
- Dozois, David J. A. et al. : Transdiagnostic approaches to the prevention of depression and anxiety., *Journal of Cognitive Psychotherapy* , **23** (1) , 44-59 , 2009.
- Drewes, Athena A. (Ed) : Blending play therapy with cognitive behavioral therapy: Evidence-based and other effective treatments and techniques., xxiii , 520 , 2009.
- Dubi, Kathrin; Schneider, Silvia : The Picture Anxiety Test (PAT): A new pictorial assessment of anxiety symptoms in young children., *Journal of Anxiety Disorders* , **23** (8) , 1148-1157, Dec , 2009.
- Dupere, V. et al. : Neighborhood poverty and suicidal thoughts and attempts in late adolescence., *Psychological Medicine: A Journal of Research in Psychiatry and the Allied Sciences* , **39** (8) , 1295-1306 , Aug , 2009.
- Durell, Todd M. et al. : Effects of open-label atomoxetine on African-American and Caucasian pediatric outpatients with attention-deficit/hyperactivity disorder., *Annals of Clinical Psychiatry* , **21** (1) , 26-37 , Feb , 2009.
- El Ansari, Walid et al. : The role of advocacy and interpretation services in the delivery of quality healthcare to diverse minority communities in London, United Kingdom., *Health & Social Care in the Community* , **17** (6) , 636-646 , Nov , 2009.
- Feifer, Steven G. : Mood and anxiety disorders in children., Feifer, Steven G. et al. (Ed) ; *Emotional disorders: A neuropsychological, psychopharmacological, and educational perspective.* , 123-146 , 314 , 2009.
- Friedberg, Robert D. et al. : Cognitive therapy techniques for children and adolescents: Tools for enhancing practice., ix , 326 , 2009.
- Gaitens, Jill : Exemplary project: Implementing strategies to reduce dropout rates of at-risk youth in an online learning environment., Schmuck, Richard A. (Ed) ; *Practical action research: A collection of articles (2nd ed.)* ., 95 , xvi , 231 , 2009.
- Gavin, Amelia R. et al. : Association between family structure in childhood and lifetime depressive disorder in adulthood among a nationally representative sample of Blacks., *General Hospital Psychiatry* , **31** (5) , 484-493 , Sep-Oct , 2009.

- Gerdes, Alyson C.; Schneider, Brian W. : Evidence-based ADHD treatment with a Spanish-speaking Latino family., *Clinical Case Studies* , **8**(3), 174-192 , Jun , 2009.
- Goodlin-Jones, Beth L.et al. : Objective sleep measurement in typically and atypically developing preschool children with ADHD-like profiles., *Child Psychiatry and Human Development* , **40**(2), 257-268 , Jun , 2009.
- Herbert, James D. et al. : Cognitive behavior therapy for generalized social anxiety disorder in adolescents: A randomized controlled trial.,*Journal of Anxiety Disorders* , **23**(2), 167-177, Mar , 2009.
- Hunt, Melissa K.et al. : Predicting high school truancy among students in the appalachian south. *The Journal of Primary Prevention* , **30**(5), 549-567 , Sep , 2009.
- In-Albon, Tina et a. : Forced choice reaction time paradigm in children with separation anxiety disorder, social phobia, and nonanxious controls., *Behaviour Research and Therapy* , **47**(12), 1058-1065 , Dec , 2009.
- Jaju, Sanjay et al. : Prevalence and age-of-onset distributions of DSM IV mental disorders and their severity among school going Omani adolescents and youths: WMH-CIDI findings., *Child and Adolescent Psychiatry and Mental Health* , **3**, pp. 11 , Sep 26 , 2009 , 29.
- Jewell, Jeremy D. et al. : Etiology and relationships to developmental disabilities and psychopathology.,,Matson, Johnny L. (Ed) ; *Social behavior and skills in children.* , 39-59 , ix , 333 , 2009.
- Kasai, Makiko : The role of Japanese culture in psychological health: Implications for counseling and clinical psychology.,Gerstein, Lawrence H. et al. (Ed) ,*International handbook of cross-cultural counseling: Cultural assumptions and practices worldwide.*,159-171,xi,563, 2009.
- Knell, Susan M. : Cognitive behavioral play therapy: Theory and applications., Drewes,Athena A. (Ed) ; *Blending play therapy with cognitive behavioral therapy: Evidence-based and other effective treatments and techniques.*,117-133 , xxiii , 520 , 2009.
- Konantambigi, R. M. ; Nandini, R. : Teaching strategies in mathematics for children in the normal classrooms: A qualitative analysis., *Psychological Studies* , **54**(3), 226-237 , Sep , 2009
- Kristjansson, Alfgeir Logi; Sigfusdottir, Inga Dora : The role of parental support, parental monitoring, and time spent with parents in adolescent academic achievement in Iceland: A structural model of gender differences.,*Scandinavian Journal of Educational Research* , **53**(5), 481-496 , Oct , 2009.
- Lancioni, Giulio E. et al. : Intellectual disability and adaptive-social skills.,Matson, Johnny L. (Ed) ; *Social behavior and skills in children.*,141-157 , ix , 333 , 2009.
- Langenkamp, Amy G. : Following different pathways: Social integration, achievement, and the transition to high school.,*American Journal of Education* , **116**(1) , 69-97 , Nov , 2009.

- Lang, Russell et al. : Treatment of elopement in individuals with developmental disabilities: A systematic review ., *Research in Developmental Disabilities* , 30 (4) , 670-681 , Jul , 2009.
- LeCroy, Craig Winston : Social skills training through groups in schools., Massat, Carol Rippey et al. (Ed); *School social work: Practice, policy, and research* (7th ed.) ., 621-637, xvi, 779, 2009.
- Lee, Alice : Review of Understanding school refusal., *Educational Psychology in Practice* , 25 (1) , 86-87 , Mar , 2009.
- Leyba, Erin Gleason; Massat, Carol Rippey : Attendance and truancy: Assessment, prevention, and intervention strategies for school social workers., Massat, Carol Rippey et al. (Ed); *School social work: Practice, policy, and research* (7th ed.) ., 692-712 , xvi , 779 , 2009.
- Leigh, Hoyle : A proposal for a new multiaxial model of psychiatric diagnosis: A continuum-based patient model derived from evolutionary developmental gene-environment interaction., *Psychopathology* , 42 (1) , 1-10, Jan , 2009 *Psychiatria Clinica*.
- Leyfer, Ovsanna et al. : Anxiety disorders in children with Williams syndrome, their mothers, and their siblings: Implications for the etiology of anxiety disorders., *Journal of Neurodevelopmental Disorders* , 1 (1) , 4-14 , Mar , 2009.
- Logan, Deirdre E. et al. : School functioning in adolescents with chronic pain: The role of depressive symptoms in school impairment., *Journal of Pediatric Psychology* , 34 (8) , 882-892, Sep , 2009.
- Mallinson, Anne : From school to further education: Student and teacher views of transition, support and drop-out., *Educational and Child Psychology* , 26 (1) , 33-40 , 2009.
- Manassis, Katharina : Cognitive behavioral therapy with children: A guide for the community practitioner., xxiii , 264 , Routledge/Taylor & Francis Group, New York, NY, US ISBN: 978-0-415-99670-9 (Paperback) , 2009.
- McCloskey, George et al. : Executive functions and emotional disturbance., Feifer, Steven G. et al. (Ed) , *Emotional disorders: A neuropsychological, psychopharmacological, and educational perspective* ., 65-105 , 314 , 2009.
- Micco, Jamie A. et al. : Anxiety and depressive disorders in offspring at high risk for anxiety: A meta-analysis., *Journal of Anxiety Disorders* , 23 (8) , 1158-1164 , Dec , 2009.
- Mistry, Rashmita S. et al. : A longitudinal study of the simultaneous influence of mothers' and teachers' educational expectations on low-income youth's academic achievement ., *Journal of Youth and Adolescence* , 38 (6) , 826-838 , Jul , 2009.
- Moore, Philip J. et al. : Information integration and emotion: How do anxiety sensitivity and expectancy combine to determine social anxiety?, *Cognition and Emotion* , 23 (1) , 45-68, Jan, 2009.

- Moreno-Ger, Pablo ET AL. : Digital games in eLearning environments: Current uses and emerging trends.,*Simulation & Gaming* , **40**(5) , 669-687 , Oct , 2009.
- Nakamura, Brad J.et al. : Differential sequencing of cognitive-behavioral techniques for reducing child and adolescent anxiety., *Journal of Cognitive Psychotherapy* , 23 (2) , 114-135 , 2009.
- Nandi, Arijit et al. : Epidemiologic heterogeneity of common mood and anxiety disorders over the lifecourse in the general population: A systematic review., *BMC Psychiatry* ,9 , Jun 1 , 2009.
- Nelson, Larry J. et al. : Behavioral and relational correlates of low self-perceived competence in young children., *Early Childhood Research Quarterly* , **24**(3) , 350-361 , 3rd , 2009.
- O'Connell, Mary Ellen et al. (Ed) : Preventing mental, emotional, and behavioral disorders among young people: Progress and possibilities., xxix , 562 , 2009.
- Owens, Judith A.; Moturi, Sricharan : Pharmacologic treatment of pediatric insomnia.,*Child and Adolescent Psychiatric Clinics of North America* , 18 (4) , 1001-1016 , Oct , 2009.
- Pagani, Linda S. : Student engagement and its relationship with early high school dropout., *Journal of Adolescence* , **32**(3) , 651-670 , Jun , 2009.
- Plank, Stephen B.et al. : An application of "broken-windows" and related theories to the study of disorder, fear, and collective efficacy in schools .,*American Journal of Education* ,115 (2) , 227-247 , Feb , 2009.
- Reid, G. J et al. : Insomnias of childhood and adolescence.,*Child and Adolescent Psychiatric Clinics of North America* , 18 (4) , 979-1000 , Oct , 2009.
- Renk, Kimberly et al. : Evidence-based methods of dealing with social deficits in Conduct Disorder.,*Matson, Johnny L. (Ed) ; Social behavior and skills in children.* 187-218 , ix , 333 , 2009.
- 佐藤正道 1992a 『世界の不登校研究の展望－1980年以降の ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献を中心に』,鳴門教育大学修士論文,p.295
- 佐藤正道 1992b 『1991年の世界の不登校研究の概観－ ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から－』,鳴門生徒指導研究 第2号,91-110
- 佐藤正道 1993 『1992年の世界の不登校研究の概観－ ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から－』,鳴門生徒指導研究 第3号,179-197
- 佐藤正道 1994 『1993年の世界の不登校研究の概観－ ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から－』,鳴門生徒指導研究 第4号,174-187
- 佐藤正道 1995 『1994年の世界の不登校研究の概観－ ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から－』,鳴門生徒指導研究 第5号,156-167
- 佐藤正道 1996 『1995年の世界の不登校研究の概観－ ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から－』,鳴門生徒指導研究 第6号,154-168
- 佐藤正道 1997 『1996年の世界の不登校研究の概観－ ERIC および PSYCHOLOGICAL

- ABSTRACTS の文献から一』,鳴門生徒指導研究 第 7 号,89-104
- 佐藤正道 1998 『1997 年の世界の不登校研究の概観一 ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から一』,鳴門生徒指導研究 第 8 号,181-203
- 佐藤正道 1999 『1998 年の世界の不登校研究の概観一 ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から一』,鳴門生徒指導研究 第 9 号,100-121
- 佐藤正道 2000 『1999 年の世界の不登校研究の概観一 ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から一』,鳴門生徒指導研究 第 10 号,86-109
- 佐藤正道 2001 『2000 年の世界の不登校研究の概観一 ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から一』,鳴門生徒指導研究 第 11 号,94-122
- 佐藤正道 2002 『2001 年の世界の不登校研究の概観一 ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から一』,鳴門生徒指導研究 第 12 号,60-85
- 佐藤正道 2003 『2002 年の世界の不登校研究の概観一 ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から一』,鳴門生徒指導研究 第 13 号,142-170
- 佐藤正道 2004 『2003 年の世界の不登校研究の概観一 PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から一』,鳴門生徒指導研究 第 14 号,74-109
- 佐藤正道 2005 『2004 年の世界の不登校研究の概観一 PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から一』,鳴門生徒指導研究 第 15 号,53-101
- 佐藤正道 2006 『2005 年の世界の不登校研究の概観一 PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から一』,鳴門生徒指導研究 第 16 号,40-81.
- 佐藤正道 2007 『2006 年の世界の不登校研究の概観一 PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から一』,鳴門生徒指導研究 第 17 号,53-96.
- 佐藤正道 2008 『2007 年の世界の不登校研究の概観一 PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から一』,鳴門生徒指導研究 第 18 号,97-123.
- 佐藤正道 2009 『2008 年の世界の不登校研究の概観一 PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から一』,鳴門生徒指導研究 第 19 号,94-126.
- Sauter, Floor M. et al. : Cognitive behavior therapy for anxious adolescents: Developmental influences on treatment design and delivery.,*Clinical Child and Family Psychology Review* , 12(4), 310-335 , Dec , 2009.
- Scheel, Michael John et al. : The academic motivation of at-risk students in a counseling prevention program., *The Counseling Psychologist* , 37(8), 1147-1178 , Nov , 2009.
- Schoenfield, Gretchen; Morris, Richard J. : Cognitive-behavioral treatment for childhood anxiety disorders: Exemplary programs.,Mayer, Matthew J.et al. (Ed);*Cognitive-behavioral interventions for emotional and behavioral disorders: School-based practice.*,204-232 , xii , 420 , 2009.
- Sharaf, Amira Y. et al. : Protective effects of self-esteem and family support on suicide risk

- behaviors among at-risk adolescents., *Journal of Child and Adolescent Psychiatric Nursing* , **22**(3) , 160-168 , Aug , 2009.
- Simon, Ellin et al. : Screening for anxiety disorders in children., *European Child & Adolescent Psychiatry* , **18**(10) , 625-634 , Oct , 2009.
- Spencer, Andrea M. : School attendance patterns, unmet educational needs, and truancy: A chronological perspective., *Remedial & Special Education* , **30**(5) , 309-319 , Sep-Oct , 2009.
- Tang, Tze-Chun et al. : Randomized study of school-based intensive interpersonal psychotherapy for depressed adolescents with suicidal risk and parasuicide behaviors., *Psychiatry and Clinical Neurosciences* , Vol 63 (4) , 463-470 , Aug , 2009
- Trampush, Joey W. et al. : The impact of childhood ADHD on dropping out of high school in urban adolescents/young adults., *Journal of Attention Disorders* , **13**(2) , 127-136 , Sep , 2009.
- Tyler, John H.; Lofstrom, Magnus : Finishing high school: Alternative pathways and dropout recovery., *The Future of Children* , **19**(1) , 77-103 , Spr , 2009.
- Van Dyke, Cydney J.et al. : Separation anxiety disorder., McKay, Dean et al. (Ed); *Cognitive-behavior therapy for children: Treating complex and refractory cases.*,115-140 , xxi , 586 , 2009.
- Wagner, Karen Dineen; Pliszka, Steven R. : Treatment of child and adolescent disorders., Schatzberg, Alan F.et al. (Ed) *The American Psychiatric Publishing textbook of psychopharmacology (4th ed.)*.,1309-1371 , xxxii , 1616 , 2009.
- Weeks, Murray : The correlates and consequences of early appearing social anxiety in young children., *Journal of Anxiety Disorders* , **23**(7) , 965-972 , Oct , 2009.
- Weissman, Adam S.et al. : Cognitive-behavioral therapy for anxious youth in school settings: Advances and challenges., Mayer, Matthew J.et al. (Ed) , *Cognitive-behavioral interventions for emotional and behavioral disorders: School-based practice.*,173-203 , xii , 420 , 2009.
- Werblow, Jacob ; Duesbery, Luke : The impact of high school size on math achievement and dropout rate., *The High School Journal* , 92 (3) , 14-23 , Feb-Mar , 2009.
- Wood, Jamie C. et al. : Teachers' preferences for interventions for ethnically diverse learners with attention-deficit hyperactivity disorder., *Adolescence* , **44**(174) , 273-288 , Sum , 2009.

A Review of the Studies about Non-Attendance at School,School Phobia,and School Refusal in the World (2009) :SATO,Masamichi